



市民がつくるまちづくり情報誌 コミュニティくさつ

2009年
夏号



琵琶湖のぶんだけ空がある

どこまでも広がる琵琶湖の空を自由に闊歩できたらどんなに気持ちがいいだろう。
(志那町湖岸にて撮影・大條紘史)

私の大切な風景
琵琶湖のぶんだけ空がある

何の花かな？

おでんになったり鰯と煮だり、また料理の脇役になったり毎日のように活躍していますね？



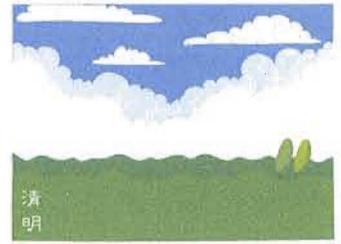
内容～コンテンツ～



- ②③琵琶湖のぶんだけ空がある
「琵琶湖の上の空」熊谷栄三郎さん
- ④懐かしさ、温かさいっぱいの展覧会
「福山聖子 草津を描く」
- ⑤ 渋川・風景の記憶絵
- ⑥⑦緑の田畑、自然の風景を守る
土が見え、空が見える土地にしておきたい
(市民農園 吉川豊大さん)
- ⑧ 俳句散歩「初夏」
- ⑨ 動植物から学んで素敵なヒトになろう
- ⑩⑪ゆっくり草津街道物語⑧ 「もののふの道長東散策」
- ⑫ ひとまちキラリ助成 今年の提案



琵琶湖のぶんだけ 空がある



今回のテーマは「風景」。しかも「私の大切な…」とくれば人の主観に左右される曖昧なもの。編集会議では編集ボランティアによる「風景談義」から始めました。琵琶湖や比叡の山々の稜線など自然が織りなす風景から、戦争の時に見たB29など今も心に焼きつく光景まで、脱線も楽しみつつ様々な風景話に花が咲きました。

話は盛り上がるも、テーマの切り口が見つからず焦りだしたころ、編集ボランティアの一人である熊谷栄三郎さんが「琵琶湖の上には琵琶湖と同じ形の広い空があるんだよ」とぼつり。一同、その話に耳を傾け納得。なかなか答えを導けない状況に光が射しました。この素敵な考え方、新聞記者を経てエッセイストでもある氏がこれまでに新聞や雑誌に記した稿の中からご紹介します。

琵琶湖の上は空

熊谷栄三郎

.....

広大な琵琶湖の上はそのまま広大な天空である。という当たり前のことに気付いたのは、十年ばかり前のことだった。

(略)

そうか、琵琶湖の上はそっくりそのまま空なのだ、電線や高層建築でこまごまと区画されたケチな都会の空ではなく、障害物のない、広く美しい水面に保証された本物の空なのだ、と。

大発見をしたような気分だった。なぜ、毎日のように琵琶湖を見ながら、そのことに気付かなかったのか、不思議でならなかった。たぶん、琵琶湖の上が空であることなんて、あまりにも当たり前すぎることだからであつたらう。

(略)

極端な言い方だが、琵琶湖はその上に広大な空があるからこそ琵琶湖なのではないか、という気がしてきたのである。そこで私は試みに、低く天井を張った、空のない琵琶湖を想像してみた。それはまさしく息が詰まる光景であつた。私は自分の考え方に自信を抱いた。空なくして、なんの琵琶湖であるうか。



考えはさらに、琵琶湖についてのみならず、その周囲の平野部にも今なお手つかずの空が残っていることに及んでいった。

湖の空と平野の空とがあいまって、近江の空は内陸の地にしては珍しいほどの広さを保持している。しかもその広い空は、周囲をぐるりと高い山並みに囲まれた中にある。広いことは広いが、海辺の空のように区切りのない広さではないことが、人々にいつそ空の意味を印象づける作用をしているようにも思われるのである。

熊谷栄三郎さん

高村光太郎の妻、智恵子は「東京に空はない。」

建築物を建てられない琵琶湖の上には琵琶湖の分だけ空が確保され、川の上には川のみならず、田んぼの上には田んぼの分だけ空があるというわけです。まちづくりセンターから空を眺めたとき、高い建物で空は切り取られています。当たり前にあると思っていた空も、風景をつくる大切な要素なんです。

こうして稿は、八日市の大風、国友花火や鉄砲鍛冶師であった国友一貫斎が天体望遠鏡をつくり太陽の黒点観測をした偉業、近江の中心部の空にそびえた安土城の天守閣などの事例を挙げながら、空の恩恵を受けてきた近江の先人たちが、その影響を文化面にも色濃く反映してきたことまで考察が及んでいます。

今では、もう言い切ってもいい。近江は周囲をほぼ完全に山並みに取り囲まれた内側に、広大な明るい空を擁している、まほろばの地である、と。
さて、人間だれしも、広い空を見れば心も晴れし、物事を広く深く考える力もわこうというものだ。(略)

(財)滋賀県文化振興事業団発行
「湖国と文化 (104号)」
『近江まほろば抄』からの抜粋



阿多羅山あたらやまの山の上に毎日出ている青い空が智恵子のほんとの空「だと言いました。」
みなさんも自分の「ほんとの空」を見つけてみてはどうでしょう。その空を守っていくことは、風景を守っていくことにつながるのかも知れませんね。
(茶木修一)

* 高村光太郎 「智恵子抄 あどけない話」

夏休み直前企画 「パパ・ママのための情報セミナー」

子育て中のパパママにぜひ知っていただきたい情報活用のためのセミナーを開催します。お子さまと一緒にOK。ぜひ、ご参加ください。(どちらも無料です)



7/9 (木)
パパママ必見!
ついにはまた
子どもにケータイを持たせるとき
～ケータイ安全教室～
講師 宮重 清美さん
(NTTドコモ)

7/16 (木)
ママ必見!
情報で私らしさを
プロデュース
講師 廣瀬 香織さん
(ピース26編集長)

どちらも10:30～12:00。市立まちづくりセンターにて。(各先着20名)
お申込み・問合せは当事業団(565-0477)まで

懐かしさ、温かさいっぱいの展覧会

福山聖子 草津を描く



道の隅に置かれた自転車、道端の椅子に腰掛けるお年寄り、切り取るように細い路地の奥から見えた通りの一瞬、広い畑を望む風景に高いところから見下ろす街並み、おもちゃ屋さんや氷屋さん、お店の人と買い物客とのふれあい、取り壊され今や見られなくなった歯医者さん、そしてお祭りの一場面…繊細な線と濃淡の墨で克明に描かれた草津の街並み24点がこの春、商店街の一角「マンボのとなり」で展示されました。

どれを見ても懐かしさと温かみが滲みでて、訪れた人たちに自分の町に帰ってきたような安らぎ、草津にこんな街並みがあったのかといった驚きを感じさせてくれます。

これらの素敵な草津の日常を描いた福山聖子さんに「マンボのとなり」でお話を聞くことができました。とても可愛く控えめな話し方ながらも、まちの風景に強い思いをお持ちの福山さんです。

そこに暮らがないと
風景って生まれないんじゃないかな



絵を描く人間にとって、どこを描くのかはいつも悩むもの。私が描きたいのは「人の暮らしや営み」が見えるところ。家の絵が多いのは、家こそ人の暮らしの中心、どの家にもその家ごとの表情があつて魅力的ですよ。風景というのは、その土地その土地の風土があつて、そこに暮らす人々は一番暮らしやすい方法で暮らしてきた。そんな積み重ねが、そのまちにしか出せない風情を生み出す。だからそこに暮らがないと、風景って生まれないんじゃないかと思つてます。

私の絵に時代を経た民家がよく登場しますが、あえてそうしているのではなく、長い年月、風雨に耐え家族の暮らしを支えてきたこ

その表情や風合いといったものを醸し出してくれるから。

また私の中に昔の商店街に漂っていた豊かな匂いの記憶が残っているせいか、匂いの感じられる町が好きで県内のそういった町を見つけては描いています。下町、銭湯のある町、洗濯物がひるがえっているシーンなどが好き。晴々としているし、洗濯物はその家の様子まで分かりますものね(笑)。

風景をセットで心に刻む

絵を描くのにその場に3、4時間いますが、絵には短い文章を添えているので、その日の天候、空の表情、雲の動き、吹いてくる風や匂いもセットで心に刻んでおきます。

「この古い蔵はもう壊そうと思つていたら、絵にしてみたらその値打ちが分かりました。もう少し使ってみることにします」とその家主さんに言われたときは嬉しかったですね。ここでの個展でも地域の人がたくさん見に来てくれましたが、「私の好きな町を描いてくれて嬉しい、大切にしないで」と言ってくれました。「見えていて心地よい絵」とも言ってもらえました。

でもそう言ってもらえるのも、小さな個人商店が昔ながらに開いている店が多いなど、この町の魅力、人の声が聞こえる町、人とのつながりがある町だからだと思います。こうして何よりも見に来てくれた人との会話を楽しんでいます。



マンポのとなりで福山さん取材。
とても楽しく温かい時間になりました。

懐かしさ、温かさいっぱい

個展の会場となった「マンポのとなり」も築70年、まさに福山さんの絵に登場しそうな古い民家。福山さんの絵にはぴったりの会場です。

そして会場に置かれたノートにはたくさんメッセージが残されていました。新聞に連載されている福山さんの絵と文章の切抜きがノート何冊にもなったという文章、さりげなく、温かい、懐かしい、人のぬくもりを感じます、季節感が溢れています。「福山さんの絵大好きです」などの言葉が並んでいます。福山聖子さんの絵をまた「マンポのとなり」で見られることを楽しみにしています。(中井徹)

心に残るまちの風景を 絵にしています!

渋川・風景の記憶絵

(財)草津市コミュニティ事業団と(特活)おうみNPO政策ネットワークでは、渋川地域で暮らしてきた人たちの、心に残る風景やまちの営みの記憶を集め、絵(屏風)にしていく「渋川・風景の記憶絵づくり」をしています。昨年から地元の老人会の皆さんにご協力いただき、アンケートや個人ヒアリング、みんなで集まって昔の様子を語ってもらう「聞き取り会」などを通じて、それはたくさんの「まちの記憶」や「暮らしの記憶」などの思い出が集まってきています。これらの大切な思い出を基に、いよいよ8月から渋川にある灯心草舎で具体的な絵の作成がはじまり、少しずつこれらのお話が目に見える形となっていきます。これまで集まった渋川の記憶の一部を紹介します。

- 競馬が開催されるころは、牛小屋に馬を預かっている家がようありました。今の商店街の中のT花屋さんのおじいさんは花形旗手でした。今でいう武豊ですわ。
(渋川には昔、競馬場があったことがあります)
- 農事試験場で秋に「農業まつり」というのがあるんですわ。ヤンマーとかの耕運機の展示場なんですわ、その日はアドバルーンが上がったり、のぼりが立ったりしてね、婦人会の人たちは自転車預かりのお手伝いに行くんですわ。ちょうど秋やさかい、野路の方から梨やさつまいもなどを売りに来ていました。
- ヤスダさん一家が草津線の踏み切りを完全に^もりしてしまってたね。家の方では一文菓子みたいなのを売っていたという話でしたわ。白い旗を振ってました、列車が来るときにね。列車が来る時、その家に合図があるようで「カンカラ」とかていうような、それで走って行きました。遮断機は交互になっていて同時に下りて回して下ろしてました。「はよ通りや」て言っていました。
- 夏ねえ、アイスキャンデー売りが田んぼに来てねえ、買ってもらうのが楽しみで、楽しみで…。自転車でお小さな旗立てて、「チリンチリン」て言うてね、「キャンデー、キャンデー」て言うてね、堤防の下にもキャンデー屋があったねえ。

渋川らしいお話や婚礼や出産・育児など女性ならではの話を聞いて感動することもあります。そこには地域のあたたかい関わりや人のふれあいがありました。こうしたみなさんの記憶に残るまちの風景が、どのような絵になっていくのか、今から楽しみです。

緑の田畑、自然の風景を守る

土が見え、空が見える土地にしておきたい



まちなかに市民農園を開園

吉川豊大さん



田んぼを吹き抜ける風が夏の訪れを感じさせてくれるこの季節。青い空を水面に映しながら日ごとに緑を濃くするあたり一面の水田は、草津の原風景の一つではないでしょうか。今を生きる私たちはまだ幸いなことに、外に出ればこの風景を楽しむことができます。一方で都市化が進み、さまざまな土地が開発され、これらの風景が刻々と変わっていることも事実です。そんな過渡期にあり、先祖代々の農地を「そのまま農地として残したい」と市民農園を開園した吉川豊大さんにお話を聞きました。

喧噪から切り離された異空間

さて、まずはその農地の場所にビックリ。市役所近く国道とバイパスの合流する、草津でも特に交通量の激しい場所の脇にあります。道路だけでなく店舗や宅地に囲まれ、国道からはそこに農地があることすら気づかないようなところ。まちの喧騒の中にある静けさ、無機質な色合いの中で放つ自然の土と緑、そこはまるで切り離された異空間といった感じです。そして三十代後半という吉川さんの若さに加え、IT企業にお勤めだという「農業とのギャップ」にまたビックリです。

この農地は一年だけプロの農家の方に預け耕作することもありますが、農作業には効率の悪い変形地という理由などから続けることができなくなりました。それまでずっとここで田畑を耕してきたお義父さんやお義姉さんから相談を受けた吉川さんは、家族の思いを考え「なんとか農地として残せ



市民農園の上には、でっかい空が広がっていました。



ないものか」と模索することになりました。そこで出会ったのが京都の(株)マイファームでした。「いつでも宅地や駐車場にはできるけれど、二度と農地に戻せなくなってしまう。先祖から預かった農地を自分たちの代でなくしてよいのか」と葛藤もありました。

身の丈にあった広さで土に触れあう

(株)マイファームは耕作されなくなった農地を地主から借り受け、区画整備し、市民農園として貸し出し、農業をもっと身近にすることを目的としているベンチャー企業です。「初心者向けの管理人付体験農園」として農作業に必要な農具の貸し出し、現地で指導やサポートを受けられるなど、初心者

者が始めやすい環境を整える農のコンサルティングでグッと感じています。この会社が入ることで地主さんは農地を残しながら市民の方々に憩いの場として喜んでもらえることや、手続きも含め多く

の借り手とのやりとりをしながら交流をもつなどメリットがいっぱい。

借り手にとっては自分たちのペースで身の丈にあった広さと土との触れあいが可能となり、農業をはじめするためのステップとして、また子どもたちに自然や環境・食育など楽しみながら一緒に学べるなど様々なメリットがあります。

レジャー感覚で農を楽しむ

(株)マイファームの岩崎さんは「借り手には農業をレジャー感覚でやってみたいという若い人たちが多く、30〜40代の人たちが自分の子どもに体験させたいとファミリーで野菜作りをする人たちが、20代のカップルが借りる例もあり、週末には同世代の人たちでバーベキューや収穫祭をしている農園もありますよ。」と話されます。吉川さんは農業初心者や若い人たちに農に触れる機会がこういった形で提供できることに興味をもちました。

「最近小学校の授業で農業体験がありますが、田植えと稲刈りだけに参加するのではなく、野菜が成長していく過程を見たり、その苦労や喜びを知ることや食べ物の大切さを体感することができそうです。野菜嫌いの子ども野菜本来のおいしさを知ってくれたいと思います。」

風景を残すことは

未来の風景をつくること

吉川さんがオーナーを務めるこの農園も20アール

(2000㎡)ほどの農地が15㎡に区画され、取材の際も4〜5人の人たちが農作業に精を出していました。ナスやトマトに水をやる人、熱心に雑草をとる人、どの人も楽しそうです。4月の開園以来、5〜6組の新米ファーマーさんが始められていて「どの人もみなさん良い方ばかりで会員どうしのふれあいが生まれてきた」と吉川さんは喜びます。

「土と自然の恵みがあって、その上には空が広がっている。そんな場所を大切にしたい。」と吉川さん。私たちは農地が店舗や駐車場になるのを見ると、便利になつたと喜んでばかりいられない複雑な気持ちになります。慣れ親しんだ風景が、失われていくからでしよう。緑豊かな草津の大切な風景を、次の世代に残したいと誰もが願っています。

そこにある当たり前の風景が意識しないと残せない時代。そんな時代に抗い農地を残そうとする吉川さんやマイファームの取り組みは「風景を残す」というよりも「未来の風景をつくらせている」ように感じました。(仲井健一)



市民農園に設置された「初心者向け管理人付体験農園」とあるマイファームの看板。

俳句散歩「初夏」

春の花が咲き終わると、草木が新芽をふき柔らかくて色のきれいな葉が出てきて、新緑の頃となります。桜を始めカシやナラの木々が萌え出て、山が笑ひ、また田植えも始まります。（解説 橋詰辰夫）

今では、早乙女姿はなかなか見られなくなり、御上神社のお田植え祭りなど、神事としてその姿が残されています。機械がタッダ、タッダと植えて行くより、艶やかな茜だすきをした早乙女が植えるほうが絵や俳句には成りますが、もう昔の記憶の中の風景になってしまいました。



早乙女さおとめや

つげのおぐしは

ささで来し

蕪村

与謝蕪村が田植えをする少女の様子を詠んだ句です。昔は陰暦5月、今の6月ごろに田植えをしていました。ですから、早乙女は五月乙女となります。最近では、かあちゃん、ばっちゃん、じっちゃん、いわゆる「三ちゃん農業」が増えエンジン付きの田植え機で苗を植えますが、昭和の中頃までは一家総出で、いや猫まで動員して田植えをしました。ですから、年頃の娘さんもお化粧や髪を整える時間もなく駆りだされて、ツゲのくしも挿さずに出てきたのでしょう。この句では田植えの最中か、田圃に急ぎ行くところはハッキリ分かりませんが、髪も梳かずに出てきた乙女の気恥ずかしさと不満気のある表情が目に浮かびます。



若葉してしずく

御目の雫

ぬぐはばや

芭蕉

芭蕉が奈良の唐招提寺に参拝して詠んだ句です。唐招提寺は、何度も何度も遭難し、途中でどうとう盲目になりながらも中国から日本にたどり着いた鑑真和尚が開いたお寺です。教科書にもよく写真が載っている鑑真和尚の肖像を見て、芭蕉は鑑真和尚の苦勞を想い巡らし、柔かい若葉で和尚の目の涙をぬぐってあげたいと想っているんですね。その雫は湿気を帯びた空気で肖像の目に出来た露だったのでしょうか、それとも芭蕉の目に溜まった涙だったのでしょうか？

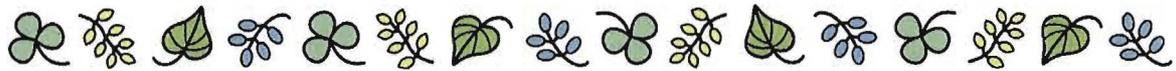
奈良には沢山お寺がありますが、東大寺や薬師寺とは違った趣きのある、この唐招提寺や秋篠寺は静かな雰囲気を持っています。機会があれば、芭蕉の追体験を試みて下さい。

「何の花かな？」

こたえ

ダイコンの花です。春の七草のスズシロ（蘿蔔）はダイコンです。アブラナ科に属する植物で、栽培品種はアオクビダイコンやネリマダイコンなど非常に沢山あります。花の形は菜の花に似ていて少し隙間のある4弁の花が咲きます。白色が基本で少し紫色が入ったり赤みが入ったりします。一つひとつの花をルーペで覗くと、とってもきれいです。

印刷では色が分かりませんが、是非HPで色をご覧下さい。



動植物から学んで
素敵なヒトになろう！

第15回

感動の心

文・絵 矢原功

5月も半ばになると、野山の新緑が一段と濃さを増して目にまばゆい。

春の花壇が終わりを告げ、畑は夏野菜に衣替え。萌芽の遅いマキやツゲも黄緑色の新芽に覆われてきて庭も明るくなった。忙しいながらも土や自然に接するには一番楽しい季節である。

日本は国土の約2/3を森林が占める世界有数の森林国であり、植物の宝庫なのだ。

ましてや私たちの住んでいる滋賀県には琵琶湖があり、周辺にはまだまだ多様な生物が共存する自然豊かな場所がある。保全や再生事業も進められているが、何よりも私たち自身がそうした環境に関心を持つことが大切だと思う。緑や自然に接すれば、無限の楽しみが待っている。

路傍に咲く春の草花と交代に、イネ科の植物が公園や川の土手、道路脇に一気に茂ってきた。

カモジグサもその一つである。昔、子どもたちが黒っぽいひげのように長く伸びた芒（のぎ）のついた穂を束ねて髪に飾って遊んでいたのが名の由来らしい。また、茎が長くて丈夫なため、穂をしごきとって投げ縄式の輪っばをつくり、カエルの顔から胴体にくぐらせてギュッと手元に引くと腰のところで締まるので捕まえることができたものだ。「夏草もまた楽し」である。

カズノコグサの穂は名のとおり小さなカズノコ状になっている。先端の種子2粒ほどを残して残りをしごきとってしまえばカエル釣りの格好の竿とな

る。それをカエルの顔の前でゆするとパクッと食いつく。昔はノンビリした立派なトノサマガエルが多かったように思う。

イチゴツナギ、ドジョウツナギなんて野草もあるが、イネ科の植物は例外なく茎が細くても強靱で折れてもちぎれることはない。だから、ポケットに入ると潰れてしまうような野イチゴを摘みでは茎に挿して持ち帰ることができたのだろう。ただ、ドジョウツナギは生きたドジョウを何匹も挿す（エラから口に通す）のに本当に使ったのだろうか。ドジョウやフナを捕るときはバケツを持っていったから草に挿すことはなかったが、ドジョウは皮膚や肛門呼吸までするから空気中でも長時間暴れて始末が悪いと思われる。

既製のオモチャと違って、自分たちが見つけた面白さや感動、不思議は別格であって、工夫をしたり、知ってる子に聞かなかで学び、発想が広がっていったのだろう。

葵祭の前日、京都の植物園に出かけて、フタバアオイを見つけた。800年前に詠まれた歌に出てくる葵草（あおいぐさ）。今でも上賀茂神社、下鴨神社で祭礼に加わる人たちがフタバアオイを髪に挿しているのを見ると、昔から自然をこよなく愛し、親しんだ人たちを想い、実に嬉しく心温まるものがある。

ちはやぶる かものやしらの葵草
かざすけふにもなりにける哉 藤原俊成

人生をいかに楽しく生きるかは、自分の置かれた環境の中で楽しみをどれだけ見出すかということ。関心が高ければ、同じ場所においても癒され、感動する度合いが高い。言い換えれば、同じことに出会っても感動する心そのものが、苦労を楽しみに変える分岐点になるように思う。

新型インフルエンザの感染が広まってきたが、ストレスの蓄積こそ大敵である。

平素から身近な自然の中に心癒される楽しみを見つけ、感動する心でストレス発散を!!



第8回 もののふの道



なつか
長束散策

写真・大條紘史 / 絵・中井徹

ゆっくり草津 街道物語

寺といっしょに城 芦浦観音寺

へるじと取り囲む堀、来る者を拒むかのようにつむ石垣…寺といっしょに城のような風格を感じさせる芦浦観音寺は琵琶湖をはさみ比叡山の守りとする天台宗の寺院です。信長・秀吉・家康の時代に最も栄え、湖上交通の要となる秀吉の時代から約100年間船奉行をあずかるなどその重要性は当時の記録や書簡も物語っています。

この芦浦さん近く、観音寺ゆかりとも言われる阿弥陀如来や鐘楼堂の石垣がある金葉寺の歴史を感じさせる門をくぐり抜けたときに感じた視線は瓦の先に留められたウサギの留蓋でした。太陽が「火」とすれば月は「水」。月を連想させるウサギには火除け



の意味が込められていると聞いたことを思い出しました。

芦浦観音寺の東北、鬼門とされる地に守護神として建てられた神社は荒瀧神社です。以前の鳥居は大津市観音寺町にあったものを移したのだといわれています。若宮神社の飛地境内とされています。

秀吉五奉行 長束正家ゆかりの地

さて長束をめぐりさらに歩を進めると、そら豆・たまねぎ・とつもち・白や薄紫の花を付けたじゃがいも畑などつつかしい風景が広がります。街道歩きの一歩は我が家流 『新たまねぎのおいしい食べ方』をそれぞれ紹介しながら先へ進んでいきます。

大將軍神社はそのいかめしい名のとおり、戦の神である経津主命（ふつぬしのみこと）がまつられており、芦浦の村の入り口に建ち、村に疫病が入り込まないよう見守っています。

「長束」の地名はこの辺りを治めた長束一族が平安時代、比叡山の領地を束ねる長だつたことが由来とのこと。今もこの地に7、8軒の長束姓があります。今、「長束老人憩いの家」として使用されている場所は、長束正家を弔うために建立された養国院があつたといわれ、

阿弥陀如来と長束正家の母（または息女）の位牌のみが残り、現在も地元の七人衆と呼ばれる人たちが守っています。

この地の出身である長束正家は算術に優れ、秀吉五奉行の一人として活躍しました。太閤検地や朝鮮出兵の食料の手配・大阪城や聚楽第の資材管理・経理など事務方としての才能を発揮し、大蔵大輔まで務めた武将でしたが、関ヶ原の戦いで西軍につき追われました。

正家が密かに秀吉をまつたとされる春日神社には木造の秀吉像があるといわれています。小さな神社ですが地元では「天神さん」と呼ばれ、2〜3年に一度サンヤシ踊りが奉納されます。1502年に作られたという古い獅子頭は市の指定文化財で祭りなどの際に見ることができます。木々の新緑と黄金色に輝く麦畑、どこかなつかしさを憶える風景に出逢い、私たちの街道歩きはまだまだ続きます。

南北朝の息吹きを感じる

専光寺に着きました。ここでは教育熱心だつた先代の祖父が地域の子どもたちを集めて学問を説いたといわれています。教え子たちが先生の遺曆に建てた石碑が向かいにあります。かわいい子ども



たちが頭を抱える寺子屋の風景が思い浮かびますね。専光寺を後にすると、ここからは志那街道を琵琶湖に向って歩きます。

不犯山（おかさずのやま） 大将軍神社は南北朝の戦いで、奥州の北畠顕家が上洛途中ここで軍を休ませ戦勝を祈願した地といわれ、この地をおかしてはならないとの言い伝えが残る場所です。

「大蔵大輔長束正家候菩提跡」と刻まれた石碑が門の脇にあるのは阿弥陀寺です。正家の位牌があると伝えられ、昔は300坪の大蔵屋敷があったとか。今では無住となった寺と「大蔵」という小字名だけに名残をとどめています。

ものふの道
志那街道を琵琶湖へ

志那街道は志那港がある志那、片岡、長束、横江、大門、金森、守山宿を結び約7km。多くの武士たちがこの道を駆け抜け、志那港から坂本へ船で渡り、都へ向った「ものふの道」も今はのどかな田園風景が広がります。

やがて印岐志呂神社の赤い鳥居が見えてきました。彼方に比叡山・比良の山並みがかつきりと浮かぶ姿を見ると「あの山を越えれば都だ」と武将たちが奮い立つ気持ちはいかほどだったのかと思いを馳せずにいられません。深い緑の森と大きく立派な赤い鳥居が対照的なこの地らしい心に残る風景もこう考えるとひとしおです。

天皇即位の際にお米を献上される「ゆきしろ」から印岐志呂神社の名がついたと聞きます。近くには南北朝の

戦いのひとつ印岐志呂の戦いで敗れた武士をまつた「一夜伏塚」があります。

木立に囲まれた若宮神社は芦浦観音寺の住職が朝夕の参拜のためにこの地に移したといわれ、元は印岐志呂神社にありました。風雨で削られた鳥居にあるかろうじて読み取れる文字からは1656年に建てられたことがわかります。

そのお隣の安国寺跡では、鳥の声が響き渡る杜のなかにお地蔵さん

がまつられています。安国寺とは足利尊氏が南北朝の戦いで亡くなった人の菩提を弔うため一國に一寺を建てたといわれ、近江ではこの地にありました。

芦浦、長束、志那街道はまだまだなつかしい風景がたくさんあります。写真に収めたり、スケッチをするには絶好の散策コースです。今回は初夏の風を感じながら歩きましたが、また秋には豊かな実りを感じながら歩いてみたい街道です。（荒川茂美）



こころをいさ
ぬねと見よう
新し、あなただ
出会うでしよう

字／中村明雄

あなたの一步
未来の風景
つくります!

今年は17の“キラリ”が集まりました

平成21年度 ひとまちキラリまちづくり活動助成

当事業団にて行っている「ひとまちキラリ助成」も今年で9年目を迎え、草津の夏を彩る一つになりつつあります。今年のキラリにも17の素敵な提案をいただきました。ありがとうございます。

活動名/団体（個人）名。公開ヒアリングの発表予定順にて表記。

- 絵本と自然と親子のふれあいの場 / 里のえほんや ほたるぶくろ
- 子供たちが明るい未来を創るために!!! / NPO法人 Field of Dreams
- 草津の温もり / 菜の花
- 共につくる喜びを伝えたい! アートinくさつ—地域の大人と子どもの“出会いの場”
/ 草津市立老上中学校 美術部
- 『毎日、かわいく 楽しく 笑って暮らそう…。』の輪を広げる
/ Laugh (ラフ) (「ワッハッハ」と声を出して笑う)のような意味)
- 『きらら』公園や道路、河川の清掃整備や住民相互の交流により地域の連帯感を育成し、
清く明るく住み良いまちづくりを醸成する / 渋川まちづくり西地区協議会
- 働くママたちの情報交換会 ピース맘・サークル
/ 自分らしく育児と暮らしを楽しむママのためのフリーマガジン ピース맘
- 昔の思い出いっぱいの高齢者に生きる喜びを!! / かさぬいトマトの会
- みんなのゆうぎ会 支え合い「障害者」から「^{しょうがいしゃ}照街者」への歩み / みんなのゆうぎ会
- 環境と人に心地良い 自然派の輪を広げよう / 手仕事と自然派おやつ会 ルピナス
- “音楽を楽しむ”という種をまき “笑顔あふれる^{まち}”を育てよう!! / オリジナルカラー
- 地域住民の健康づくりの普及活動 / NPO法人 生命の貯蓄体操普及会
- 公園の美化活動をしながらか、楽しい・うれしい・美味しいをしましょう。 / コックサン
- 廃材による地域活性化プロジェクト / 立命館大学環境デザイン団体RecoLab
- 活かす女性の作り方 / 山田真由子
- からっと、からっと みんなが唄おう! / ^{おおかみがわおん}狼我和音
- マイタウンマップ / NPO法人 アイ・コラボレーション

公開ヒアリング

7月12日(日) 9:30~12:00
まちづくりセンター ふらっとサロン

今回ご提案いただいた内容は公開ヒアリングにおいて、ご自身の言葉で熱く語っていただきます。ぜひご参加を!採否の結果については、932情報ネット(下記URL)にて8月初にお知らせします。

<http://www.joho932.net>

編集後記

▼白菜やキャベツは収穫が終わると引っっこ抜かれて捨てられます。小生は切り株から伸びた花芽を食べます。エコの時代に「もったいない食」は大変美味で幸せになります。お試しあれ!(橋詰)▼抜けるような碧い空に純白の雲。空にはえもいえない魅力があり、いつも限りない空想の世界に入り込んでしまいます。(大條)▼水辺のハンゲショウ、山ではマタタビの葉が白く化粧中。梅雨空の緑に映えて美しい。四季の移ろい、自然の妙。(矢原)▼福山聖子さんの絵を見たら草津の街を歩きたくりますが何しろこの暑さ。秋風が立ってからにしましょう。(中井)▼今年は46年ぶりの皆既日食が見ることができます。全国でも部分日食が観察できる7月22日は空を見あげ天体ショーを楽しもう(荒川)▼紙に飛ぶ鳥や雲を描くと描くつもりがなかつた空も一緒に描くこととなります(輪郭WS)。今ではビルやマンションを描くと空も一緒に描いてるのかなあ(茶木)

市民編集ボランティア募集!

コミュニティくさつ編集部

(財)草津市コミュニティ事業団内

〒525-0037

滋賀県草津市西大路町9-6(まちづくりセンター内)

電話 (077) 565-0477

ファックス (077) 562-9340

メール com-com@mx.biwa.ne.jp

URL <http://www.kusatsu.or.jp/>

community



再生紙使用

~地球にやさしいまちづくり~